

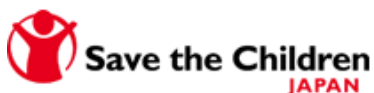
「2016年世界栄養報告」セミナー
—「約束」から「インパクトをもたらす行動」へ—

議事録

2017年4月17(月) 10時-12時
於 衆議院第一議員会館

共催

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン
特定非営利活動法人 日本リザルツ
特定非営利活動法人 栄養不良対策行動ネットワーク
国際母子栄養改善議員連盟



目次

1. 開会挨拶	7
参議院議員/国際母子栄養改善議員連盟 会長 山東昭子氏	
内閣総理大臣補佐官 和泉洋人氏	
2. 基調講演「2016年世界栄養報告の概要」	9
世界栄養報告 独立専門家委員会 共同議長 エモン・ウドンケスマリー氏	
3. 「栄養改善から取り残される人々—SDGsの目標2の達成に向けて」	13
栄養政策アドボカシー・アドバイザー セーブ・ザ・チルドレン UK シルビア・ザボー	
4. 「栄養問題の解決に向けた取り組み」	17
セネガル首相府 国家栄養不良対策 コーディネーター/SUNムーブメント 執行委員会 共同議長 アブドラエ・カー氏	
5. 「栄養改善に向けた企業の取り組み」	20
株式会社タニタヘルスリンク ヒューマンサービス企画部 部長/管理栄養士 龍口知子氏	
6. パネルディスカッション	20

**2016年世界栄養報告（Global Nutrition Report: GNR）セミナー
－「約束」から「インパクトをもたらす行動」へ－**

日時：2017年4月17日（月）10：00～12：00（ランチレセプション 12:15～13:15）

会場：衆議院第一議員会館（東京都千代田区永田町2-2-1）大会議室（B1F）

共催：公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、特定非営利活動法人日本リザルツ、
特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン、特定非営利活動法人栄養不良対策行動
ネットワーク、国際母子栄養改善議員連盟

後援：外務省

協力：公益財団法人アジア人口・開発協会

<プログラム>

時間	内容・登壇者
10:00～10:15	開会 ・司会：参議院議員／国際母子栄養改善議員連盟 事務局次長 今井絵理子氏 開会挨拶 ・参議院議員／国際母子栄養改善議員連盟 会長 山東昭子氏 ・内閣総理大臣補佐官 和泉洋人氏
10:15～10:35	基調講演「2016年世界栄養報告の概要」 ・世界栄養報告 独立専門家委員会 共同議長 エモン・ウドンケスマリー氏
10:35～10:50	「栄養改善から取り残される人々－SDGsの目標2の達成に向けて」 ・セーブ・ザ・チルドレン UK 栄養政策アドボカシー・アドバイザー シルビア・ザボー氏
10:50～11:05	「栄養問題の解決に向けた取り組み」 ・セネガル首相府 国家栄養不良対策 コーディネーター／ SUNムーブメント 執行委員会 共同議長 アブドラエ・カー氏
11:05～11:20	「栄養改善に向けた企業の取り組み」 ・株式会社タニタヘルスリンク ヒューマンサービス企画部 部長／ 管理栄養士 龍口知子氏
11:20～11:55	パネルディスカッション 「約束から行動へ－どのように栄養改善の成果につなげていくべきか」 ・モデレータ：JICA 上級審議役 榎本雅仁氏 ・パネリスト：外務省国際協力局 審議官（地球規模課題担当）森美樹夫氏、 エモン・ウドンケスマリー氏、シルビア・シャボー氏、 アブドラエ・カー氏、龍口知子氏
11:55～12:00	閉会挨拶 ・ワールド・ビジョン・ジャパン 常務執行役員 片山信彦氏
12:15～13:15	ランチレセプション（多目的ホール 1F）

登壇者プロフィール



エモン・ウドンケスマリー (Emorn Udomkesmalee) 氏

世界栄養報告 独立専門家委員会 共同議長

国際食糧政策研究所 評議員

SUN カントリーネットワーク・ファシリテーター

1985年、マサチューセッツ工科大学にて博士号（栄養学）を取得。その後、1987年まで米国農務省ベルツビル人間栄養学研究センタービタミン・ミネラル栄養学研究室にて、博士研究員として勤務。マヒドン大学栄養研究所ではディレクターを務め、現在は同研究所シニアアドバイザー、およびジョンズホプキンス大学ブルームバーグ国際公衆衛生学校特任准教授。微量栄養素のアセスメント、生体内利用率、代謝に関する研究、微量栄養素欠乏症に対する食品ベース介入の有効性、および母子栄養政策の策定と実施に関する研究を行っている。



シルビア・ザボ (Sylvia Szabo) 氏

セーブ・ザ・チルドレンUK 栄養政策アドボカシー・アドバイザー

サウサンプトン大学、世界エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）、国際移住機関、欧州委員会での勤務を経て、セーブ・ザ・チルドレンUKに入局。途上国の子どもの栄養改善と社会的排除の是正を目指したリソースおよび政策の動員を行う。欧州-中国管理職交換訓練プログラム参加、ドバイ政府大学招聘奨学生。学術論文、報告書、政策概要、不平等に関する著作など、幅広く発表を行っている。



アブドラエ・カー (Abdoulaye Ka) 氏

セネガル首相府 国家栄養不良対策コーディネーター

SUN ムーブメント執行委員会 共同議長

公衆衛生と社会開発の専門家として、過去15年間セネガルの栄養改善に従事。地域栄養プログラムのエリアマネージャーとして、地域栄養センターの管理、事業レポートの分析、プロジェクトデータベースの運営等を経験。2002年、セネガルの栄養改善に取り組む国家栄養不良対策委員会（Cellule de Lutte contre la Malnutrition : CLM）の統括責任者として、事業を計画・運営し、政府内各省庁のセクター計画に栄養の視点が反映されるよう尽力。現在、国家栄養対策コーディネーターとして、政府機関の枠組みの強化や、政策や戦略の策定、各セクターにおける栄養の主流化、栄養介入政策に対する増資等、栄養改善に対して多様な局面から取り組む。



龍口 知子氏

株式会社タニタヘルスリンク ヒューマンサービス企画部 部長
管理栄養士・健康運動指導士

食品会社、総合病院、介護関連企業を経て、株式会社タニタヘルスリンクにて、メタボ対策の特定保健指導など、健康サポートを行う専門職部門の責任者、特定保健指導統括責任者として、健康支援サービスの業務管理および健康支援を行っている。

全国の自治体、企業、健康保険組合にて健康講座、料理セミナーなど。累計 500 件以上の講演を担当している。



森 美樹夫氏

外務省 国際協力局審議官(地球規模課題担当、NGO 担当大使)

1985 年、東京大学法学部卒業、同年外務省入省。総合外交政策局軍縮不拡散・科学部不拡散・科学原子力課企画官、中東アフリカ局アフリカ第二課長、国際連合日本政府代表部公使、経済部および総務部長を歴任。在オーストラリア日本国大使館公使。2013 年に在ケニア日本国大使館公使を経て 2016 年 9 月より現職。

在ケニア日本大使館公使在籍中にはアフリカで初めて開催された TICAD VI の準備と開催支援に当たり成功に貢献する。



榎本 雅仁氏

独立行政法人国際協力機構上級審議役（役員）

1983 年、東京大学法学部卒業、同年農林水産省入省。1989 年ハーバード大学ケネディ行政大学院修了（公共政策学修士）。WFP などの国際機関や SUN、IFPRI、民間セクター、栄養に携わる多くの NGO 等との連携のもと、アフリカの栄養改善のため、昨年 TICAD VI において、国際栄養プラットフォームである IFNA（Initiative for Food and Nutrition Security in Africa）の創設において中心的役割を果たした。来月エチオピアにおいてパートナー会合を開催し、今年は重点国において行動のための戦略策定を進める。

CARD（Coalition for African Rice Development）を通じたアフリカの稲作支援を進めるなど、食料、農業、栄養に関する課題を担当。

参議院議員/国際母子栄養改善議員連盟 事務局次長 今井絵理子氏（総合司会）

本日はお忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、参議院議員の今井絵理子です。どうぞ宜しくお願いします。本日のセミナーの共催となっております「国際母子栄養改善議員連盟」の事務局次長を務めております。皆さんどうぞ宜しくお願い申し上げます。

本日のセミナーは、「2016年世界栄養報告」の日本版発刊を記念して、開催させていただきました。皆様のお手元に、本日お披露目となる世界栄養報告の日本版を配布させて頂いております。この報告書は、国際的に著名な研究所である「国際食糧政策研究所」がとりまとめた報告書です。本セミナーは3回目の開催となりますが、議員連盟と共催となるNGO4団体をはじめとした市民社会、そして各省庁、企業、有識者・学术界、国際機関など幅広い方々にこのようにご参集頂き、誠に嬉しく思っております。国際栄養への関心の高さを実感しております。今日のセミナーでは、報告書の概要、そして栄養改善の具体的な取り組みもご紹介させていただきます。本日お集まりの皆様には、ぜひともそれぞれのお立場から、栄養課題の改善に向けてできることは何かを思い巡らせて頂きながら、セミナーにご参加頂ければ、主催者としてこれほど嬉しいことはございません。

さて、去年に引き続き、貴重なご講演を頂くゲストを海外からお迎えしております。お話を頂く順に、同報告書の独立専門家委員会の共同議長でいらっしゃる、ウドンケスマリー氏。タイからいらっしゃいました。そして、国際的なNGOであるセーブ・ザ・チルドレンのイギリスより、栄養政策アドボカシー・アドバイザーを務めていらっしゃるザボー氏もお迎えしております。さらに、セネガルからはカー氏がいらしてくださっております。カー氏は、セネガル首相府にて、国家栄養不良対策コーディネーターを務めていらっしゃるほか、栄養に関する国際的な運動であるSUNムーブメントの執行委員会共同議長でいらっしゃいます。栄養に関する深い知見と経験をお持ちで、国際的にも著名な三氏をお迎えできたことを心より嬉しく思っております。ようこそはるばる日本にお越しくださいました。ありがとうございます。そして、国内からもゲストをお迎えしております。株式会社タニタヘルスリンクより、ヒューマンサービス企画部部長でいらっしゃいます龍口氏がいらしてくださっています。また、パネルディスカッションのファシリテーターを国際協力事業団・JICAの榎本上級審議役をお願いしております。パネルディスカッションには、外務省国際協力局より森審議官もご参加くださっております。さらに、国会議員の方々にもお忙しい中ご参加を頂戴しております。国際母子栄養改善議員連盟の会長として母子の栄養の課題に取り組んでくださっております山東昭子先生に本日会場にお越し頂いております。そして、内閣官房より和泉内閣総理大臣補佐官にもご参加頂いております。それでは最初に、山東先生より開会のご挨拶を頂戴したいと思います。山東先生、どうぞ宜しくお願いします。

1. 開会挨拶

参議院議員/国際母子栄養改善議員連盟 会長 山東昭子氏

皆様おはようございます。本日の催しは世界栄養報告セミナーと、そして私が会長を務めております世界母子栄養議員連盟の共催でございますけれども、朝早くからこんなにたくさんの皆様方がお集まりを頂きまして心より感謝を申し上げる次第でございます。

2016年世界栄養報告の日本版が完成を致しました。喜びも一入でございます。中身は数々のデータや各国の事例などを用いながら、世界の栄養不良の実態、状況、成果や議題を包括的にまとめた唯一の報告書でございます。

私は長らく食の問題に取り組んで参りましたが、世界の子どもたちの栄養状況はもちろん、我が国でも食生活の貧困な子どもたち、あるいは偏った栄養で不健康な子どもたち、また若者たちが存在することは非常に残念でなりません。世界の母子たちの栄養が少しでも改善されるよう、今日お集まりの皆様方がなお一層手を携え、そして行動して下さることが何よりも重要でございます。

本日は和泉首相補佐官もお越しでございますけれども、国と致しましても、各省庁の情報交換、また連携も心がけるよう、この問題に関心のある私ども仲間の国会議員ともども全力を尽くして参りたいと存じます。

本日のセミナーが実りのあるものになることを期待致しまして、挨拶とさせて頂きたいと存じます。どうぞ一緒に頑張ってお参りしましょう。

参議院議員/国際母子栄養改善議員連盟 事務局次長 今井絵理子氏（総合司会）

山東先生、力強いご挨拶をありがとうございました。ともに力を合わせて、そして行動を進めていくことが重要であると、再度意を強く致しました。引き続きまして、和泉内閣総理大臣補佐官より開会のご挨拶を頂戴したいと存じます。

内閣総理大臣補佐官 和泉洋人氏

皆様おはようございます。早朝でもありませんが、こんなに多くの方が集まってこの問題に対する関心の深さを改めて感じました。まずは、本日この世界栄養報告セミナーについて、お招き頂きましてありがとうございました。また海外のキーノートスピーチの方々、心から歓迎を致します。そしてまた、こういった大きな会議を開催された関係機関の皆様方のご尽力に対して心から敬意を表する次第でございます。

この栄養不良の問題、今、山東先生からお話ございましたが、私どもが取り組む国際保健の取り組みにおいて重要なテーマであります。生命を直接的に脅かす飢餓の状態はもとより、平時の状態における微量栄養素不良、あるいはカロリー不足から、過体重あるいは肥満まで、世界中で3人に1人が様々な形の栄養不良に苦しんでおります。3人に1人ですから、この会場はみんな健康的な人が多いですが、これだけいると60人くらいの栄養不良の方がいらっしゃる、という計算になります。

こういった問題に対して、昨年の世界栄養報告 2016 は、私たちに対して、この世界の現状をしっかりと教えてくれました。こうした栄養不良の改善は疾病および死亡のリスクを軽減しまして、人々が経済的社会的活動に生産的に参加することを可能にします。このため、日本が国際協力の柱とする人間の安全保障を実現する上でも栄養は重要な分野であると考えております。

このような問題意識のもと、日本政府は安倍総理のリーダーシップのもとで、昨年の G7 サミットの議長国として、また昨年初めてアフリカで開催されました TICAD VI の共催国として、さらには Nutrition for Growth のパートナーの一人として、関係する国々や関係者とともに、栄養改善に関する議論を主導して参りました。G7 サミットおよび TICAD VI でもまとめられました文章でも栄養を大きなテーマとして、取り上げたところでございます。

栄養は食料、保健、農業等に関わる分野横断的課題であります。冒頭、山東先生から話がありましたが、関係する各省も非常に多くございまして、これをブリッジして日本国として統一的に取り組むことが求められる分野でございまして。このため政府としましても官民連携パートナーシップのもと、栄養改善事業推進プラットフォームを発足するなど、途上国における栄養改善に向けた取り組み等も積極的に行って参りました。今後とも民間のイノベーション、あるいは市民社会の現地住民に寄り添った活動、さらにアカデミアの専門的知見を充分に活用しながら、栄養に関する SDGs の達成に向け、共に取り組んでいきたいと考えております。

先程初めてこのプログラムを拝見させて頂いたのですが、パネルディスカッションのタイトルが「約束から行動へ」とされています。まず約束することは約束して、その約束をちゃんと実現する、と。そういった意味では今日のタイトルは「約束から行動へ」ではなくて、まず「約束」、そして「約束から行動へ」と。こういったタイトルがふさわしいかと思っておりますが、そういった取り組みを最大限日本としてもやっていきたいと思っております。

本日このように多くの関係者の方々が集まり、栄養分野の問題解決に向けて活発な意見交換を行えることは大変意義があることだと思っております。本セミナーが栄養問題の改善、さらには国際保健分野への日本の一層の貢献となることを祈念しまして、私の挨拶とさせていただきます。森さんこのあとは宜しくお願い致します。以上でございます。

参議院議員/国際母子栄養改善議員連盟 事務局次長 今井絵理子氏（総合司会）

和泉補佐官、日本政府としてのお立場から、非常に勇気づけられるコメントを頂戴し、誠にありがとうございました。皆様も深く感銘を受けられたことと思っております。どうぞ引き続き、日本として栄養改善の為に世界をリードして頂くことを、心より期待しております。

それではここで、国会議員の先生がいらっしゃっております。ご紹介だけさせていただきます。衆議院議員左藤章先生、衆議院議員小田原潔先生、衆議院議員三原朝彦先生。ありがとうございました。さて、それでは本日のメインテーマであります「2016 年世界栄養報告」について、エモン・ウドンケスマリー氏よりご講演頂きます。ウドンケスマリー氏は、タイのマヒドン大学栄養研究所シニア・アドバイザーを務めていらっしゃいます。また、この報告書作成にあたって、独立した専門家委員会が立ち上げられており、その共同議長でもいらっしゃいます。その他、多数

の栄養関連機関の委員なども歴任されております。それではウドンケスマリー様、どうぞ宜しくお願いします。

2. 基調講演「2016年世界栄養報告の概要」

世界栄養報告 独立専門家委員会 共同議長 エモン・ウドンケスマリー氏

おはようございます。私の唯一の日本語でございました。もっと勉強するべきですね。皆様おはようございます。ご紹介ありがとうございました。私の方からも、議長に対して御礼を申し上げたいと思います。このイベントをいろんな共催者と一緒に主催をしてくださった方ありがとうございます。また、今回来られたことを光栄に思います。世界栄養報告チームを代表してご招待頂きましたことを本当に光栄に思っております。

世界栄養報告というのは独立した報告になります。それを作成したのは独立専門家委員会です。グローバル、つまり世界をカバーしている内容であり、またありとあらゆる形態の栄養不良というものをカバーしております。私どもはこの様々なデータを各国から収集致しまして、その結果を最適な形で編纂しております。

なぜ、私どもがここにいるのか。2013年国際成長のための栄養会議を当時のイギリスの首相が主催された時、世界栄養報告、Global Nutrition Report というものを作成して、そしてどのような約束、ハイレベルなコミットメントがされたかということのアカウンタビリティ、そしてそれに対する進捗性に対するアカウンタビリティのモニタリングをするべきだという提言がありました。そこで、2016年のこの報告には次のような主たるメッセージが盛り込まれております。まず第一に、栄養不良というのは個人のレベル、そして社会のレベル両方でインパクトをもたらし、つまり影響をもたらし、そして多くの人の人生あるいは生活に対する悪い影響を身体的そして精神的にも、そしてある国の人材の質に対しても、悪影響を及ぼしかねないということです。これがまさに今回のこの報告のメッセージでございます。

世界銀行そしてアフリカ開発銀行という二つの主たる開発銀行の二人の総裁がつぎつぎ異なる会合でこのようなことを仰っています。彼ら共通の信念というのは世界の投資を脳の灰白質、つまり脳のインフラに対して投資するべきであり、そして栄養というのはそこで大きな役割がある。つまり特に金融セクターの方々が投資というものの性格自体を今見直す時期にあるのではないかということを主張していらっしゃいます。

そして二つ目のメッセージ、この報告書から出た所見として、今現在、世界はどのような状況にあるのか、ということがあります。つまり2012年に行われました世界保健総会、つまりWHOの総会で加盟国はそれぞれ約束をしました。まず、国際栄養目標を採択すると約束したのですが、その進捗状況はどうでしょうか？2016年の現状、まだまだ遅れをとっている国がありますが、しかし希望は残っています。それをちょっとご覧頂きましょう。

このスライドかなり細かいスライドですけれども、4つの色の意味をご紹介します。まず緑。緑というのは順調に様々な目標を達成している国々。赤というのはまだ目標を達成していない国、そして今後さらに進歩が必要な国です。その数を表しているのですが、赤を緑に変え

ていくことが必要です。たとえば貧血、それから成人の過体重、そして肥満、成人の糖尿病といった分野がまだまだ今後、多くの作業を必要としているということが見て取れます。

では日本のダッシュボードはどうでしょうか？日本の現状を見てみましょう。まず日本にとって緑となっているのは消耗症。つまり、消耗症の国際目標に対して日本は順調に進捗しています。一方で、小児の過体重、そして完全母乳育児につきましてはデータが存在しないという回答結果でございました。ですから、これからデータが出てくるものと思います。一方、赤い分野、つまり、まだまだ改善が必要な分野がある。そのフォーカスポイントとなる分野が貧血、成人の過体重そして肥満、それから成人の糖尿病になります。こういった4つの分野を今後日本はフォーカスし、注目し、そして力を入れていかなければならないということになるわけです。

これは、我々として日本のレベルを 190 の世界栄養報告に報告を挙げている国のなかでどのようなランキング、つまりどのように評価しているのかを示しています。つまり、数字が小さいほどよりランクが高いということなんですけども、この結果としてまずダッシュボードとアラインしているのが、女性の貧血、成人の肥満そして成人の糖尿病で、まだまだ改善が必要です。一方で子どもの発育阻害などに関しましては他の国と変わらないということです。

そして3つ目のメッセージ、こちらが特に2016年の栄養報告についてはとても重要だと思う点ですが、持続可能な開発目標（SDGs）が2015年に採択されました。で、我々は栄養というのがこのSDGsを達成するうえで中心的な役割を果たしているということがわかってきました。240以上ある指標が17のSDGsの目標にまたがってそれぞれ決定されておりますが、そのうち56、それも栄養に非常に関係性があると思われる56を我々は評価しております。この56というのは17のSDGsのうち12に分散されております。

意外だったのがゴール2つまり目標2、これが食料安全保障そして栄養に直接関係する目標として、7つの栄養に関する指標というのがあるわけですが、一方ジェンダー平等、それから保健、健康的な生活に関する目標の方がより栄養に関する指標が多いんです。つまりここでのメッセージというのは、栄養は横断的な課題である、つまり、栄養で前進することができれば、このSDGs達成に向けても前進が叶うのだということです。以上が今後我々が検討していかなければならない、考えていかなければならない課題でございます。

次の4つ目のメッセージは、現在多くのコミットメントが言葉ではされています。しかし、コミットメントと実際のニーズの間には大きなギャップがあるというのも現状です。どのようなギャップがあるのでしょうか？まず、世界栄養報告では、いわゆるSMART目標というものが国家計画の中で、どのくらいあるかということを見ています。スマートというのはS(Specific) 具体的、M(Measurable) 計測可能、A(Achievable) 達成可能、栄養にR(Relevant) つまり適切である、そしてT(Time-bound) 期限が明確である、いつまでに達成したいかという期限が明示されているという、その頭文字をとっています。122を超える国家計画の中で、実際スマートと思える計画というのは半数以下です。つまりまだまだ改善の余地が大きく残されているというわけです。

では、日本はどうでしょうか？日本がスマートな目標を立てているか、と言われるとまだ全

での6つの目標についてはスマート化はされていません。次に挙げる3つの目標を具体的に言いますと、まず、肥満、それから糖尿病、そして減塩、この3つにつきましては、実はスマートな目標を設定できている国は本当に少ないのですが、しかし、実は日本はこの3つの分野に、世界栄養目標につきましては、直接的なスマートな目標を立てていらっしゃるでしょうか？日本についてのダッシュボードでこの分野というのが、赤を緑にする上でこれから注目しなければいけないと申し上げたその分野とちょうど重なっているわけです。

スマートなコミットメント、そして目標というのは、まさに車の両輪でございます。実は我々がトラッキングしているいくつかのデータからわかったことがあります。それは、優れた目標を設定して、それにコミットメントをしたら、達成できるというエビデンスです。そして直接的な栄養目標を策定した国が、例えば、発育阻害の目標などを最も大きく削減できたということです。また、民間企業もそうです。多くの民間企業は非常に具体的な、つまり直接の目標を立てています。コミットして、そしてそれに対して実行した。その結果、達成率が高かったわけです。

一方、公共分野、例えばドナー等が公の場で、言質を取られる、つまり、これだけやってこれだけの支出をしますというコミットメントをしたドナーというのは実際に目標を達成する確率が高いということがわかっています。これがなぜ私どもがコミットメントを重視するのかの理由です。つまりインパクトを出す。実際の行動と実行を出すための、コミットメントというのはとても重要なわけです。

この成長のための栄養ということにおけるコミットメントでありますけれども、コミットメントがスマート基準を達成しているのが3分の1というレベルにとどまっています。コミットをしたこの団体というのは、まだそういった意味ではNCDと呼ばれている非感染性疾患、また肥満ということにおいて、きちんとした言及がされていません。その中で、それぞれの回答者の3分の1だけが返答をしたわけです。そして民間企業もそうでありました。しかしながら、この財務的な資金コミットというのは60%が達成しているということでもありますので、これはそういった意味では大変勇気づけられる数字というふうに思っております。より多くの行動が必要だと考えます。

この各国の政治政策を展開するという中におきまして、このようなレポート、報告があがっています。日本では塩分とトランス脂肪酸に関する政策データというのがないということです。たとえばトランス脂肪酸というのは循環器系の疾患に関わっています。また子どもたちを対象としたマーケティングの規制というのも達成されていないというのが今の日本の現状となっています。

やはり、行動を起こさなければいけないというのが次の具体的な領域であります。まず第一に、政治的なコミットをしていくということでもあります。すべてのあらゆる形の栄養不良に終止符を打つための政策です。データを見てみますと、国としてこのような政治的なコミットをし、スマート基準を目標値として設定している国もあります。そういった国々の進捗は大変高いわけです。ブラジル、エチオピア、ケニア、マハラシュトラ州というのは大きくこの進捗を伸ばしている国々です。

2つ目の行動への呼びかけということにおきましては、やはり、もし大きな影響を及ぼすインパクトが必要ということになると投資をしなければなりません。投資をすることは、より多くの投資ということもそうですが、よりよい配分が必要です。数字の大きさだけではありません。どこにこの資金を投資するのかということにおいてインパクト、影響力は変わってきます。

ドナーの世界各国の今の現状、特にこの栄養に特化した形での、具体的な、直接的な介入ということは、ビル&メリンダ財団の次に続くのが日本という立ち位置となっています。今の具体的な日本の投資というのは、5700万米ドルというのが直接的な形での介入投資となっています。そして、ご覧頂きますように、ここにいくつかの段階が分かれております。ビル&メリンダゲイツ財団というのは今8400万米ドル、すでに今後におきましてはこの投資金額を拡大するという発表をしております。

希望があります。私たち、このチームからのお願いです。世界各国様々なところに訪問致しましたが、多くの方々の希望として日本が本来の栄養に直接特化した介入として、ぜひ1億ドル以上の支出をして頂きたいというものがあります。

なぜ、このような形で投資を拡大しなければならないのでしょうか？予測ということで、このグローバルな世界栄養目標を達成するためには、政府がこの投資を2倍にしなければいけないということがわかっています。そしてドナーは3.5倍そのコミットを拡大しなければいけないということ。そして、平均的に投資は約3倍ということが求められているわけなのです。これが世銀の方から報告された数字、想定数字ということでもあります。

今、現状を確認するためには正しいデータが必要です。それによって投資を最大効果のある形で使っていかなければいけないわけです。どれくらいの投資をどこに照準を絞って何をしていくのか、それにはデータが不可欠です。さらにはこの投資をするにあたって、既の実証された効果的な解決策であるというところに投資をし、新しい栄養におけるソリューションを見出していかなければなりません。栄養というのは横断型なテーマであります。その中で他の分野にも声をかけて支援をもらう。社会保障、農業そして衛生、健康、教育、そういった事例がありますが、それを民間、そして官僚の方々もふまえて、ソリューションを見出していかなければなりません。

その次にはやはり、呼びかけというのは世界の中で大きな変化があるというのがわかっています。国の44%が今、様々な形での栄養不良に直面しています。栄養不良、また非感染性疾患、そして肥満もあります。同じ国、同じ地域のなかで、同じ世帯の中でもこの問題が乱立しているわけです。

最後の2枚のスライドですが、これに関しては私たちが何を期待しているのか、そして日本国が栄養不良をグローバル規模で解決するために何を貢献することができるのかということについてお話をさせてください。まず栄養における世界の直接投資、スマート基準におけるコミットというのがやはり重要となってきます。その中での日本のリーダーシップ、ドナー国の中にあつてのリーダーシップが重要です。日本は2020年にオリンピックの開催国となるわけです。その中におきまして、まだ初期段階ではありますが、日本がハイレベルでの、成長のための栄養ということにおいて会議を開催し、栄養不良を撲滅するための取り組みをされると発表がされていま

す。そして国家の栄養における投資計画、日本の統計を見ますと、まだまだこの領域におきましては多くのことがなしえるのではないのでしょうか。

また、特に日本が強力であると思われる領域におきましては、今まで長年のなかで、まだ十分に民間企業、特にこの食料システムの中における企業において、栄養に対して貢献をするという啓蒙活動をすることです。民間企業というのは大変重要な役どころになっていますが、それによって食料、そして多くの市民、そして国民の食生活に深く関わっています。その中におきまして様々な形の栄養不良の問題に対する撲滅の道筋をたてることができるわけです。民間企業のこの領域における投資、コミットメントというのは、コミットをしてくださいれば多くの国々で大きな成果があがっているのです。そして、日本はその部分におきまして、強みがあると思います。民間企業を巻き込んで、他のどの国よりも大きく前進する力があると考えています。ここは日本において期待する領域でありますし、ぜひとも貢献を頂きたいと思っています。

最後に皆様方、今回のパートナーの方、提携先の方、この世界栄養報告のレポートをあげるにあたってのご尽力を賜った方に心から御礼を申し上げたいと思います。これは世界における取り組みです。世界の取り組みとして、色々な分野でのリーダーシップを発揮していただきました。改めまして、ここの皆様、そして国会議員の皆様、さらには共催、各企業の方々に御礼を申し上げたいと思います。

日本は多くを貢献して頂ける、コミットをして頂ける、約束をして頂ける、そして単に日本のみならず、世界の様々な形の栄養不良を撲滅することができる力をもっています。多くの人口の苦しみを取り除くことができるというふうに確信しております。そういった意味では大変勇気づけられます。多くの方々が今日この場にご参堂頂いたことに大変大きく感銘を受けております。皆様、誠にありがとうございました。

今井絵理子 自民党参議院議員 国際母子栄養改善議員連盟事務局次長（総合司会）

ウドンケスマリー様、誠にありがとうございました。様々な課題がある中、報告書の重要なポイントを的確にお伝えくださり、非常に興味深く、且つ、様々な有益なお話を頂戴致しました。ありがとうございます。続きまして市民社会からご登壇頂きます。子ども支援を専門に行っています国際NGOのセーブ・ザ・チルドレン・イギリスから、栄養政策アドボカシー・アドバイザーでいらっしゃいますシルビア・ザボー氏です。途上国における栄養改善のための政策に関わり、去年、セーブ・ザ・チルドレンが出した栄養の格差に関する報告書の執筆陣のお一人でもいらっしゃいます。それでは、ザボー様、どうぞ宜しくお願い致します。

3. 「栄養改善から取り残される人々—SDGsの目標2の達成に向けて」

栄養政策アドボカシー・アドバイザー セーブ・ザ・チルドレンUK シルビア・ザボー

ありがとうございます。皆様おはようございます。このような形で皆様の前でお話させて頂くことを大変光栄に思っております。議員の皆様、そしてこのテーマに沿った様々な組織の方々にご参加頂き、誠に御礼申し上げます。

さて、私のテーマでありますけれども、さっきのスピーカーの補完をする立場でお話をさせて頂きたいと思います。そして特に排除というサブテーマを挙げていきたいと思います。現在このSDGs、それに関連するアジェンダを考えますと、誰も取り残さないという考え方、置き去りにしないという考え方は重要と考えております。そのテーマに沿ってお話を進めていきたいと思っております。

さて、本日のお話の内容ですが、主な状況ということで簡単に栄養不良の現状を話して、排除と栄養不良についてお話をさせて頂きたいと思います。そして各国での取り組みについてご紹介をさせて頂きます。そして最後に提言といった形でまとめていきたいと思っております。そして、日本語のスライドで進めておりますので、お話と一致した形でうまくミスをしないように進めていきたいと思っております。

ご存知のように1億6000万人の子どもたちが現在発育阻害になっています。非常に大きな数字です。減少はしているものの、やはりこれだけ多くの子どもたちが苦勞しているわけです。そして、同時に4100万人の子どもたちが過体重ということです。この数字というのは実は上がってきています。たとえば、10年前、20年前の数字から大幅に伸びてきているわけです。ということで発育阻害というものは遅々として下がってはいるものの、一方で過体重というものが急激に増えているということで、新たな課題がでてきたということになります。

そしてより多くの子どもたちが被害に合う可能性があるわけです。スウェーデンのケティンゲン大学と連携をし、研究を行ってそのあと栄養不良の排除についての報告書を出しました。私どもの予測では、大胆なアプローチをとらない限り、異なったアプローチをとらない限り、このWHOの目標を達成できるのは140か国のうち39か国のみであるということです。ということで、なかなか努力が進んでいないということです。そして今後、発育阻害となりうる子どもたち、その多くの子どもたちは不利な状況にある家族の子ども、たとえば地方ですとか、あるいは貧困に苦しむ家庭の子どもたちになる可能性が高いということになります。

この栄養不良ということに関しましては、もちろん、個人レベルでも、あるいは経済レベルでも、あるいは社会的なレベルでも非常に重要で、GDPに直接影響するという事実も出てきています。ということで、この栄養不良の問題ということに関しては、ここでは割愛致しますが、国の生産性あるいは発展性ということに直結しているのは間違いありません。これは、発育阻害の子どもたちの数でこのような形で若干減少しているわけですが、一方で下段の線、こちらの方は過体重の子どもたちが増えているということがわかります。これは先に申し上げた通りです。

では、一体どういった排除というものがあるのでしょうか？栄養不良、排除というような議論がされて色々なグループの子どもたちがいますが、こういった子どもたちが不利な立場にあるわけです。例えば性別、例えば男の子である、女の子である。あるいは、民族の違いにおいても不利になる可能性があります。例えばミャンマーやベトナムですとか、そういった違いというのが明らかに見られております。あるいは、都市部なのか農村部なのか、移住地域においても差があります。例えば紛争等で移動しなければならない、移民となった子どもたちもやはり不利な状況にあります。そして、障害。例えば、アフリカ地域などはよく不利であると言われているので

すが、結構南アジアが不利であるということで、数字にはでていません。例えばインドは発育障害の子どもたちの数が圧倒的に高いわけです。そして、パキスタンが3位。バングラデシュも人口が多くやはりそういった意味でも発育障害の子どもたちが多い国です。実はこの東南アジア太平洋地域、非常に驚くことですが、なんと、子どもたちの内 11%近くが発育障害です。これはインドネシアの人口を考えると、まだまだ発育障害の子どもたちも多い、そして中国も然りです。

ということでグローバルな視点でお話をさせて頂きましたが、国の中においても地域格差があるということがわかっています。セネガルの方からも、お話があるかと思えますけれども、こちらご覧頂きますと、地域の差を国の中で示しています。例えば中央にあるオレンジ・黄色、これが国の平均を指しています。一方で、左右に伸びている線がありますけれども、これは発育障害の比率が高いところが一番右側、左側が一番低いということです。たしかパキスタンですが、中には発育障害の割合がなんと8割といったような地域があるわけです。8割の子どもたちが発育障害。一方で、20%という地域もあります。ということで私自身この数字を見て非常にショックをうけました。

一方で、都市部、農村部、地方地域というのがやはり不利な立場にある、と。そしてさらに都市部の中でも、ますますグローバル化していて、例えばバングラデシュ、ネパール、アジア、そしてそれ意外にも今アフリカ地域でますます都市化が進んでいるということで、スラム地域がやはりできてしまうということで、ここでの格差も大きく広がっています。

また一方で、貧困層と富裕層ということで、やはり貧困層に生まれている子どもたちの方が発育障害に合う確率が高いということが出ています。例えば、グアテマラ。一番上に出っていますが、平均しますと、グアテマラの子どもの4割が発育障害です。一方で貧困層の子どもの発育障害の比率はなんと60%になります。一方で裕福な地域あるいは裕福な家庭ということになりますと20%を切るということで、これも貧困富裕の格差があるということは間違いありません。

さて、この栄養不良の原因に関しては割愛をさせて頂きます。ただ、申し上げられるのはやはり、この排除というものが地域によってはあるということを見ると、文脈に沿った分析が必要で、栄養不良がこの国のこの地域で発生しているのはなぜなのかということ細かく分析していく必要があります。いわゆる一つの解決策を全てに当てはめることはできないわけです。午後のプレゼンテーションでもこれは掘り下げてお話させて頂きたいと思います。

さて、ここでいくつか私どもが展開しているプログラムの例をご紹介させて頂きたいと思います。市民社会において活動していて、私どもの強みの一つとしましては、やはり草の根の活動をしてアドボカシーをしながら、その地域に合ったプログラムを開発するというものです。これはナイジェリアの北部の地域の結果で、私も何度も訪問させて頂いていますが、特に北東部というのが貧困地域で紛争も多発しています。それ以外にも、ボコ・ハラムというテロ組織が活動していたり、あるいはそれ以外に文化・風習でやはり女性のエンパワーメント、社会進出というのが阻止されています。

ここで文脈に沿った分析を行いました。各家庭を訪問させて頂いて、それぞれの状況というも

のを分析しました。障壁が一体なんなのか。例えばナイジェリアにおいては、プライマリー・ヘルスケア・アクトが実践されているわけで、この母子保健、リプロダクティブヘルスへのアクセスというものが本来であれば無料のはずなのですが、実のところそういったサービスにアクセスできない家庭があるということがわかりました。もちろん医療、薬、あるいは医師に診察をしてもらうこともできないと。そこで私どもがアドボカシーを行って、自治体と一緒にやって対応を進めていきました。そして、きちっと予算を割いた形での計画実施を行いました。

これ以外にもネパールの例をここでご紹介していますが、ドナーあるいは国と連携をし、こちらのプログラムではありませんが、日本の JICA とも教育のプログラムで連携をしております。私どもの様々な介入、草の根の介入をすることによってどれだけ差を生み出すことができるかということが、こちらの表にまとまっております。

わずか2年間で、介入をした地域、例えば左2本の柱をご覧頂きますと、いわゆる不利な立場にある地域とそうでない地域で介入をした場合にはその差が6ポイントでした。一方で介入をしなかった、これは2つ目の2本の柱ですが、プログラムを展開しなかった、という場合はそうでない地域と不利な立場にある地域のギャップというのは16ポイント近くです。ということで、適切なものを絞った介入を行うことによって、これだけの違いを生み出すことができるという裏付けができています。

このプログラムというのは入念に細かく計画をしなければならぬ、設計をしていかなければならないということも、私どもはこれらから学びました。そして、もちろん女性、男性そして男児女児といった形で教育活動、啓発活動を行うことが必要であると考えます。

さて、こちらがまとめになります。本プログラムにおきましては今後も JICA の皆様や日本の政府のリーダーシップと連携をしながらぜひともすすめていきたいと思っております。より多くの強力なプログラムを設計し、強力なイニシアチブを展開し、栄養不良を根絶したいと考えております。ありがとうございました。

今井絵理子 自民党参議院議員 国際母子栄養改善議員連盟事務局次長（総合司会）

ザボ一様、誠にありがとうございました。母子の栄養改善に取り組む身としては、子どもたちの現状を聞きまして、さらに栄養への取り組みが重要である、必要であるという意を強く致しました。続きまして、セネガルより、首相府にて国家栄養不良対策コーディネーターを務めていらっしゃる、アブドラエ・カー氏からご講演頂きます。カー氏は、「栄養のための取り組み拡充：スケーリング・アップ・ニュートリション」、略して「SUN」のムーブメントの執行委員会共同議長でいらっしゃいます。SUN は、栄養改善のための政治的コミットメントと説明責任を強化していこうという運動、そして枠組みです。加盟国政府に加え、国連機関、市民社会、民間企業等が参加しています。それでは、カー様、宜しく申し上げます。

4. 「栄養問題の解決に向けた取り組み」

セネガル首相府 国家栄養不良対策 コーディネーター/SUN ムーブメント 執行委員会 共同議長
アブドラエ・カー氏

ご紹介ありがとうございました。議長、そして、皆様おはようございます。この度皆様の前でお話しすることができますこと本当に嬉しく思っております。またこの大変重要な瞬間を皆様と共有できるということは大変な光栄でもございます。

私の出身のセネガルという国は日本から遠く離れておりますが、日本に参りましたその理由というのは皆様方と、栄養不良が高負担な国、つまりセネガルという西アフリカの負担の大きな国の現状というものを皆様方と共有するという、それからグローバルなレベルで私どもがこの SUN ムーブメントとどう関わっているか、また SUN 以外の様々な世界中の取り組みとどのように関わっているかというその情報を提供申し上げたいと思ったからです。そこでまず、セネガルにおいて栄養改善で過去 10 年間どのような実績が上がったのか、それから私どものこれから 10 年間の見通しについてご紹介をしていきたいと思っております。

まず、セネガルでは、長年にわたり栄養の開発にとっての重要性、特に人間の開発にとっての重要性というのは認識して参りました。というのは栄養は、5 歳未満児死亡の原因の 45% を占めております。男女合わせてです。また、栄養への投資というのは非常に成果があります。栄養に対する 1 ドルの投資は 16 ドルの成果を出すのです。また、栄養の改善は GDP という重要な指標への増加に繋がるということもわかっています。また、それに加えてやはり栄養というのは人権の一つだと我々は考えております。個人のレベルで考えた場合、栄養への投資というのはまさに知能指数、子どもの IQ への投資に他なりません。その子どもの将来にとって大きな意義を持ちます。つまり、子どもが自らの知能というものを最大限に生かすような育成ができる。そして、大人になったときに自分だけではなく、自分の国のために役に立つ人間になれるということです。また、栄養での投資というのは非感染性疾患を予防する上でも重要であります。つまり、これは医療費抑制にもなるわけで、国にとって栄養への投資というのは非常にスマートな賢い投資といえると思っております。そこで、私どもは 2030 年に栄養不良を終わらせるという国際目標に向かって邁進しておりますが、まだまだ努力が必要です。ここで我々は知恵を結集して本気を出さなければいけません。

また、グローバルなレベルで起こっていることも、とても重要だということがわかっています。栄養というのは今大きな機運が生まれている。というのは、栄養が SDGs の中心となっているからです。これは前の方も仰っていましたが、例えば貧困、それから健康そして栄養、すべてに渡って栄養というのはとても重要です。また、栄養を巡る機運というのは大きく増加していて、SUN のムーブメントに参加している 59 の国以外の多くの国も世界保健総会、それから ICN2（第 2 回国際栄養会議）などの目標に向かって邁進しております。

この機運というのは多くの国が共有しております。セネガルもその一つです。セネガルはこの様々な戦略目標を採択しております。それがこの SUN という国のネットワークを繋いでいます。SUN の目標というのは、まず政治的な環境の改善、それから栄養改善に繋がるような効果的な行

動をどのように制度化するのかという点。そして、共通の成果の枠組みを作るということ。それから大幅に栄養のための資金を増加する、まず最初に国家予算の動員から始めるというようなことが網羅されております。

セネガルでは栄養の主流化に向けて確実に歩を進めております。このような制度的な枠組みというものを作りました。私は首相府におりますけれども、首相府ということはつまり国の最も高いレベルでの支援があるということです。その栄養に関する局というのが、各セクター間のそして各省庁間の調整を行っているわけです。また、私どもはそれぞれの分野別の省庁、それから民間部門、そして様々な分権からのサービスとも協力しています。また、市民社会とも地方自治体を通じてコミュニティを動員し、様々な栄養サービスを提供しています。

もう一つの重要なマイルストーンとして、ファイナンス、資金があります。資金ということで栄養向けの国家予算が2002年から2015年の間に、30万米ドルから570万米ドルと大きく増額しています。これによって地方72%、つまり国土の72%をカバーすることができています。また5歳未満児の70%に対して、必須の栄養サービスを提供することができているわけです。

こちらはセネガルでの栄養状態の改善を示しています。それもこの10年間1人あたりの経済成長が非常に弱々しいなか、これだけの改善がありました。例えば発育阻害、これは減少しております。他の国と比較したのが右側のチャートなのですが、ブルーの点、これがセネガルです。発育阻害についてはセネガルのランキングというのはこちらになります。セネガルと似たような所得水準の国との比較をしております。

セネガルで栄養状態が改善しているのは、このようなフレームワーク、枠組みをつくることに成功したからです。この枠組みがまさに、マルチセクターあるいはセクター横断型のプラットフォームとなり、そして様々なセクターごとの介入の調整役になっているわけです。また、ステークホルダーのアカウンタビリティを強化することにもつながっておりますし、そして、色々な介入の分権化によってより実効性のある介入を行うことができるようになっております。また、それをマネージすることができるようになっておりますし、各レベルのアクターのプランニング、モニタリングもできるようになっております。

我々は多くの課題に直面しております。今現在もそれが続いておりますが、まず、分権化をどうやって進めるかということが最初の課題です。分権化というのはまだ達成できておりません。やはり、技術的な手段、あるいは資金などのサポートも必要です。またNGOとか現場のコミュニティレベルでの、色々な活動してくれる組織というのが全国に存在しない、また全国にあっても横のつながりがないということが問題の一つとなっております。最も脆弱な方々というのは最もへんぴな国のへんぴな地域にいらっしゃるわけで、そこには全く横のつながりがないというのが現状です。また資金支援も必要です。資金支援を維持していかなければ、こういったサービスを特に5歳未満の子どもたちにとって実効性のある、質の高いものにはできません。

またSUNムーブメントの精神、これが我々の柱となっております。それによってステークホルダーのアカウンタビリティを強化し、また、様々なステークホルダーそしてパートナーなどのエネルギーをそれぞれのプラットフォームで結集することができます。それをまとめているのが共

通の原理原則、目標、そしてプラットフォームです。プラットフォームとしては民間、市民社会、政府、学术界、ドナー等が参加して、色々なセクターのパフォーマンスを改善し、そして、情報共有、知識共有のためのプラットフォームとして活用しています。

セネガルには様々な目標が向こう 10 年間のために設定されていますが、我々はより多くの努力が必要です。もちろん進捗はありましたが、それでは充分ではないということがわかって参りました。この分析によりますと、まだまだ長期的に栄養改善を達成するためには多くの課題が残されているという評価結果が出ています。例えば、栄養改善の介入については主要なセクター、つまり、農業、保健、教育、社会保護、そして水と衛生といったような重要なセクターではまだ優先順位が低いということがわかっております。また、まだバラバラなアプローチをとっている、つまり調整が必要です。また、栄養の課題でまだ対応できていない低出生体重ですとか、貧血、子どもの肥満といった分野が残されています。だからこそ、革新的なそして断固とした努力を継続しないと栄養改善の野心を実現することはできません。

ですから、私どもは政策を変えて、そして新しいマルチセクター型の戦略計画を立てました。新しい栄養のビジョンを定義し、そして、グローバルな指針などを採択することをしてしています。そしてさらにこれから 10 年間これを強化していきたいと思えます。また参加型のアプローチでこのマルチセクター型のアプローチを導入しています。マルチセクター戦略計画というのはこの新しい政策に基づくもので、そしてその政策の実行をサポートするものです。また、これはツールとして様々なセクターをエンゲージメントし、そしてとても重要な各セクターの行動計画を実現しています。各行動計画については予算がつけられています。そして我々が設定した栄養の目標を全体として達成できるようになっています。また、色々な実行、モニタリング、評価、そして調整というメカニズムの改善も図っています。様々なセクター、様々なアクターがこの枠組みの下で、協力をするようになっていきます。その共通の指針というのが、政策の柱です。

4 つの柱がありますが、まず最初に栄養価の高い食物の生産です。そして栄養価の高い食物の適切な加工、それから流通、そして教育といったような必須なサービス、あるいは衛生そして保健そして栄養サービスなどから構成されています。これを、我々は 2025 年に向けた様々な目標達成のために実現していきたいと思っています。これはまさに国際的なレベルの目標と合致しています。これは我々にとって非常に重要です。

我々はこの道のりを 1 人で歩むわけではないということも十分わかっています。戦略的な目標に対する道のりには様々なパートナーが密に協力してくださっています。JICA の名前があります。それから私どもの努力をサポートしている強力なイニシアチブとして SUN、それから日本の IFNA（食と栄養のアフリカイニシアチブ）といったイニシアチブがあります。今後も効率を高めお互いから学ぶために、たくさんの機会があると思えます。

日本は非常に大きなアクターです。リーダーシップという意味でも、そして、今後様々なアクターにも共鳴するような、響くような栄養の声。つまり、栄養が重要であり、栄養に対する投資はスマートな投資だという、そういう声を日本は持っていらっしゃると思えます。それをもって私どもセネガルのビジョンというものを達成したいと思えます。そのビジョンというのはすべ

での市民が最適化された栄養状態を適切な行動を採択することで達成できる、そういう国にしたいと思います。それが我々のビジョンです。ありがとうございました。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン アドボカシー・スペシャリスト 大野容子（総合司会）

カー様、セネガルやSUNの取り組みについて貴重なご報告をありがとうございました。これまで司会を務めて頂きました今井先生が委員会ご出席のため、先ほど退出なさいました。代わりまして、私、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの大野が司会を務めさせていただきます。どうぞ宜しくお願い致します。では、続きまして、国内の民間企業からのゲストをご紹介します。株式会社タニタヘルスリンク ヒューマンサービス企画部より、龍口知子部長にお越し頂いております。龍口氏は、管理栄養士、健康運動指導士の資格をお持ちでいらっしゃるしまして、専門性を活かした幅広い活動を展開していらっしゃいます。日本企業としての栄養改善への取り組みについて、ご紹介頂きます。それでは、龍口様、どうぞ宜しくお願い致します。

5. 「栄養改善に向けた企業の取り組み」

株式会社タニタヘルスリンク ヒューマンサービス企画部 部長/管理栄養士 龍口知子氏

(省略)

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン アドボカシー・スペシャリスト 大野容子（総合司会）

龍口様、民間企業から興味深い取り組み事例をご紹介くださり、誠にありがとうございました。それでは、続きまして、パネルディスカッションに入りたいと思います。大変恐縮ですがスピーカーの皆様、モデレーターの方、前方の椅子にお座り願えますでしょうか？ありがとうございます。パネルディスカッションからは、外務省国際協力局より、地球規模課題のご担当でいらっしゃいます、森美樹夫審議官にもスピーカーの皆様に加えまして、ご参加頂きます。森審議官、ありがとうございます。ここからは、ファシリテーターを務めて頂きます、JICAの榎本雅仁上級審議役にマイクをお渡ししたいと思います。榎本上級審議役、どうぞ宜しくお願い致します。

6. パネルディスカッション

「約束から行動へ—どのように栄養改善の成果につなげていくべきか」

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏

JICAの榎本でございます。これから35分間パネルディスカッションのコーディネーターをさせて頂きたいと思っております。まず最初に、今から森審議官がご参加頂きますので、森審議官の方から日本政府による栄養の取り組みについて一言お話を頂きたいと思っております。

外務省国際協力局 審議官（地球規模課題担当）森美樹夫氏

皆さんおはようございます。外務省の森でございます。今日は宜しくお願い致します。最初に、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、日本リザルト、それから

栄養不良対策行動ネットワークを始めとする皆さんが2016年世界栄養報告の日本語版の制作にご尽力頂いたこと、それからもちろん、本日出席のウドンケスマリーさんを始めとする、専門家委員会の方で2016年世界栄養報告を取りまとめられたことに対して高い敬意を表させていただきますと思います。

外務省は昨年に引き継ぎまして、本年もこのセミナーを後援させて頂いております。今後も世界中で栄養の改善に向けた取り組みに日本政府としての貢献、協力という形で参加していきたいと考えております。その日本政府の栄養分野に対する取り組みを手短にご紹介させていただきます。

まず、最初に和泉内閣総理大臣補佐官からご紹介がありました通り、G7それからTICAD VIといった国際会議において、栄養改善に向けた議論をこれまで推進して参りました。それから2016年9月には新興国、途上国を含む各国の栄養改善のために、民間連携を通じた包括的ビジネスを含む事業の国際的展開実現のための栄養改善事業推進プラットフォーム、NJPPPと略しますが、これを発足致しまして、こうした枠組みの下で途上国における栄養改善に向けた取り組みを実施してきております。

これに加え、先程の和泉補佐官の話にもございました通り、昨年夏にケニアのナイロビで開催されましたTICAD VI、第6回アフリカ開発会議の場では、JICAから、食と栄養のアフリカ・イニシアティブ、こちらはIFNAと申しますが、を立ち上げました。このTICAD VIの基調演説、開会の時の演説で、安倍内閣総理大臣はIFNAについても触れながら、日本政府が栄養改善を重視する姿勢を示しました。それから、先程来、セネガルから来られたカーさんのお話にもご紹介されております通り、2009年には途上国における栄養改善への取り組みを拡充することを目的とするSUN、Scale Up Nutrition 信託基金というのが世界銀行に立ち上げられましたが、このSUN基金においても日本は設立の当初から中心的メンバーを務めてきております。

それから、これらのSUN、NJPPP、それからIFNAにこういった形で日本政府が資金拠出等の貢献を行っているかにつきましては、まずSUN信託基金に関しては、2009年から数回に分け、2200万ドルの拠出を行ってきております。2020年以降、次の拠出のフェーズに入るわけですが、今後こういった形の事業を実施していくかについて、現在議論を進めており、これまでこういった成功事例があるかということ踏まえて、効果が実証された栄養対策についてこの実施を進めていく予定です。

また、NJPPPにつきましては、農林水産省から2000万円の拠出を行ってきております。IFNAに関してはご紹介した通りJICAからの予算でまかなっており、この後、榎本JICA上級審議役からももう少し詳しくご説明を頂いた方がよろしいかと思っておりますので、私のご紹介はここまでにさせて頂いて、榎本さんにバトンタッチしたいと思います。どうもありがとうございました。

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏 (モデレーター)

ありがとうございます。今森審議官の方からIFNAについてご言及頂きました。IFNAは昨年、TICADにおきまして立ちあげたイニシアチブでございます。その趣旨は、栄養改善を現場レ

ベルで加速していこうというのですが、クロスセクトラルな形で、民間の企業さん、NGO さん、また政府、またアフリカの国々が一緒になって取り組んでいこうという、そういうプログラムでございます。今年は 10 か国を対象に致しまして、ベースラインの仮調査を進めたいと思っております。また、南アフリカのヨハネスブルグに NEPAD という機関がございます。アフリカの開発の窓口をされている機関でございますけれども、そこと共同で事務局を立ち上げるということをお計画しております、今年度の予算で申し上げますと 3 億程度、手当てする予定でございます。まだ事業は開始しておりませんが、JICA の事業やその他私どものパートナーの皆様方と事業を進めていくこととなりますので、そこで加速的に事業費を確保していければ、というふうに考えているところでございます。

パートナーの皆様さんとは、先程申し上げました NGO さん、あと民間の企業の皆様方、色々な方にご加入いただくということでやっております。JICA、NEPAD、FAO、そのほか、WFP、UNICEF といった今日も会場に来られております国際機関の皆様方と民間の企業の皆様方、NGO の皆様方と来月の 5 月にエチオピアの方でパートナー会合というのを予定させて頂いております。ぜひともご参加頂けることを希望したいというふうに思っております。

それでは、ここからパネルの方に入りたいと思います。2016 年世界栄養報告のテーマでございますが、「約束からインパクトをもたらす行動へ」ということで、今まで色々なコミットメントを頂いてきておりました。また、先程補佐官の方からまずコミットメントをもう少し、しっかりすることが重要というお話を頂戴致しました。確かに、まだコミットメント等、不十分な部分はございます。そのコミットメントをきちんとして、そこからいかにインパクトへ移していくかということが今回のテーマの中でも取り上げられておりますので、今日は先程来、プレゼン頂きました、各分野でご活躍の皆様方の方からそのインパクトをもたらすための行動へどうやって移していくのか、何が求められるのか、また各々の立場でどのようなことをしていきたいというふうに考えていらっしゃるのかということをお聞きしていきたいと思っております。

先程のパネルのご発表の順番でやらせて頂きたいと思っております。まず最初、エモン・ウドンケスマリーさんでございますけれども、先程、今回の報告書の提言につきましていろいろご説明頂きまして、まずコミットメントも必要であろうということ、また SMART な取り組みが大事だと、また、省庁間の連携、効果的な資金投資といったようなものがますます求められているというようなことをお話頂戴致しましたけれども、これから 3 分から 4 分という短い時間ですけども、先程申し上げられましたことを踏まえて、どういうところを強調していきたいのか、お話し頂ければと思います。それでは、お願い致します。

世界栄養報告 独立専門家委員会 共同議長 エモン・ウドンケスマリー氏

ありがとうございます。学術界の方からの立場で、研究者の立場でお話をさせて頂ければと思います。いわゆるこの約束からインパクトへ移行する中での学術機関としての役割はどういうものなのか、やはりそこには行動が必要です。どういった具体的な行動が必要なのかということですけども、いわゆる研究という観点からは 3 つの分野があるのかなと思っております。

まず、1点目と致しましてはデータです。これはどのようなデータが重要なのかというところで検討してきているわけなのですが、学术界と致しましては様々な研究を行って、色々なデータや証拠というものを集めているわけなのですが、その中で、本当に我々が求めているものはどのようなものなのか。いわゆるターゲットを設定するための優先順位化ができるようなデータが必要なわけですね。そしてさらに、意思決定を誘導するためのデータです。具体的に何をやらなければならないのかという意思決定です。多くの企業においてはたくさんのデータが集められておりますけれども、本当に果たして質の高い適切なデータが揃っているのかということです。ですから量だけではなくて質の高いデータも必要です。

そして2点目と致しまして、やらなければならないことですが、実証された解決策というものを探しているようです。でも、実証されたので機能するはずなのですが、どうやって機能させるのかというところの知識が足りないのかなと考えております。いわゆる実施、実行ということで実行の科学の部分が必要なわけですね。これがやはり学术界が取り組むべきもう一つの領域です。

そしてもう一つがキャパシティ開発です。やはり、学部卒の方々に即戦力になれるような、あるいは健康、保健、栄養等の分野で活躍できるような人材というものが重要です。キャパシティというものを構築することによってこれまで進展してきた各国においてそれが維持できるように担保していかなければならないということで、以上3つの領域をお話しさせていただきました。

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏（モデレーター）

どうもありがとうございます。続きまして、シルビア・ザボーさん、セーブ・ザ・チルドレン。先程、インクルーシブな栄養改良が非常に大事だということですか、お話を頂きましたけれども、先程のことを踏まえまして、また一言お願い致します。

栄養政策アドボカシー・アドバイザー セーブ・ザ・チルドレン UK シルビア・ザボー

ありがとうございます。発言権を与えて頂いてありがとうございます。まず市民社会という観点から私どもの優先順位というのは、学术界とはそんなに違うとは思いませんが、どちらかという補完的かもしれません。私も3点申し上げたいと思います。

私ども NGO から見て、一番重要なのはやはり草の根レベルでのエンゲージメントだと思います。つまり密にコミュニティそれから家庭、そして現場の人々と一緒に仕事をして、ニーズを把握しそのニーズに対応していくことを担保するということだと思います。また、コミュニティと各家庭と一緒に連携するというのが我々が今努力をしている一番重要な点です。これは今後も努力を続けなければいけないと思います。それによる行動変容を引き起こすことです。というのはどれだけの予算をつけてもどれだけの資金を約束しても、その資金が十分なインパクトをもたらさないのであれば意味がないわけですね。例えば、母乳育児率というのが文化的な慣習が古いものが残ってしまっているのが低いとか、あるいは衛生の習慣というのが、やはり水準が低いというので、病気が蔓延するといったようなこと。これはやはり草の根での努力が何よりも重要

になります。

それから2つ目は文脈の分析。Contextual Analysisです。これはかなり研究が関わる分野でもあります。また、先程申し上げた格差と排除、排斥でも重要です。それを改善するには文脈を評価することです。つまり私どものプログラムの成果、そして我々のプログラムによってもたらされたエビデンスを評価することで、その特定の国あるいは地域の栄養不良の決定的原因は何かということを探るといことです。例えばミャンマーですけれども、ミャンマーというのは研究者にとってはまさに天国です。というのは、本当に様々な課題、様々な問題をミャンマーは抱えています。例えば、気候変動のホットスポットと言ったとき、これも私の関心事項の一つですけれども、ミャンマーにはそのすべての原因が揃っています。ミャンマーの各地域はそれぞれ異なる、それもターゲットされた栄養不良、そして食料安全保障の対応が必要なのです。ですから、文脈に応じた評価というのが2つ目の点です。

それから3つ目、それは、午後にもうちょっと細かく話すことになると思いますが、アカウントビリティです。説明責任です。どれだけの資金を公約し投資したとしても、アカウントビリティのメカニズムが備わっていなければ意味がありません。市民社会の観点から言えば、これは私どもの主要な役割の一つです。つまり、毎回政府に説明責任を求める。地方自治体の、例えばナイジェリアとかソマリアとかマリでもどこでも、各自治体のドアを叩いて、彼らが栄養改善に配布あるいは配分した予算はきちんとその目的に使うということを担保するというです。それからもう一つ、とても重要なことは、やはり最新のデータを取るということですが、アカウントビリティそれからデータギャップでも量を収集すること。それからすでに入手できているデータをきちんとうまく活用するということが重要です。そのために私どもアカウントビリティについてのある報告書を出しました。特にデータユーザーの視点から見たアカウントビリティの報告書というものを作っておりますので、ぜひ読んでください。そこでいくつか勧告、提言をしています。アカウントビリティの問題をどうやって改善するか、特にデータという観点からどうやってアカウントビリティを改善するかという報告をぜひ参照して頂きたいと思ます。

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏（モデレーター）

続きまして、アブドラエ・カーさんでございますけれども、先程、SUN との連携のお話ですとか、政府の中でのコーディネーションメカニズム、また、地方への権限移譲の中でいかにリザルトベースの成果を上げていくのかというようなお話を頂きましたけれども、またその辺を踏まえまして、コメント頂きたいと思ます。

セネガル首相府 国家栄養不良対策 コーディネーター/SUN ムーブメント 執行委員会 共同議長 アブドラエ・カー氏

ありがとうございます、議長。私も3点ございます。まず第一は私にとって政治的なコミットメント、国レベルでの政治的なコミットメントが鍵となると信じております。それは本当に強化、

強調しなければなりません。やはり国のレベルでのベストな成果をあげるためには、これは重要です。インパクトが必要であれば、マルチセクター的なアプローチで動くことが重要であり、そうすると栄養改善のための優れたスチュワードシップが重要です。やはり国レベルで最善の栄養改善のための体制を整えるということです。

それから、2つ目は実行です。マルチセクター型の介入については、やはりもちろんイノベーションが必要ですが、そのためにはパートナーシップの構築が何よりも重要です。マルチセクター型の介入を実行して、そしてコミュニティレベルでシナジー効果を引き起こす、そしてコミュニティレベルで起こっている現状をきちんと把握して、そして最も有効な対策を適用するということです。状況は時によっては非常に複雑です。あるいはその複雑な状況を充分理解するだけの時間の余地がない場合もあります。長期的なレジリエントなアプローチというのをコミュニティレベルで作るための努力がその中でも必要だと思います。どの国でも与えられた機会、チャンスをしっかり捉えるべきです。つまりだれがきちんとデリバリーをしてパートナーシップを構築するうえで一番力を持っているのか。例えば、民間なのか、あるいは市民社会なのか、それとも学術界なのかきちんと見極めるべきです。

政府がそういったパートナーとパートナーシップを組む、そして技術的なキャパシティ、能力も強化するべきです。栄養直接介入というのは技術的なキャパ、能力が必要です。つまり、様々な運用システムに関わる人たちのトレーニング、様々な規範などをきちんと尊重するということ。例えば成長を管理するとか、或いは、栄養不良の対策をとるときにはその社会慣習といったものを考慮に入れることが必要です。それがインパクトをもたらします。ですからリサーチ、それも運用面でのリサーチを強調するべきでしょう。リサーチというのは単に博士号を持っているかどうかことではなくてインパクトを与えるためのリサーチ。そして我々が何をしなければいけないかを教えてくれるリサーチです。それも最も効率のよいやり方で、です。我々、知識はありますけれども、じゃあ最も効率の良い最も有効なやり方がわかっているかというところではない場合があります。インパクトがあるためにはそれが必要です。また、マルチセクター的なアプローチのためには栄養改善のための機構があって、優れた調整ができれば重複を避けることができる、無駄を避けることができるのです。我々はより効率を求めることが必要だと思います。重複をなくしてお互いから学ぶ、一緒にその成功要因を共有して学ぶということです。

それから3つ目はファイナンス、資金提供のスケールアップです。政府もやはり変化を起こさなければいけません。それは資金についての透明性を高めるということです。透明性を高めることで、様々なステークホルダー間で信頼を強化しなければなりません。国内のステークホルダー、それから政府、そしてそれぞれ政府の予算を求めている各省庁、特に栄養直接介入の主権を求めているそういったところの間では、やはり透明性、そして、信頼の構築が重要です。また国外のパートナーとの透明性、信頼性も重要です。一つのプラットフォームを介して、何がどこでどれだけ投資されているかをきちんと把握するということが、これがとても重要です。そういった意味で資金提供の透明性、これがマルチセクター型のプラットフォームを多くのアクターで様々なレベルでつくる、新しいアプローチの成功に繋がると思っています。これがインパクトをもたら

すためには重要です。もう既に今日、今、この瞬間も発育阻害というものが広がっております。これを 10 年後に軽減するためには今すぐに行動を起こすことが重要です。

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏（モデレーター）

現在行われている企業の新しい取り組みについて先程お話し頂戴しましたけれども、また一言これからアクションを進めていくにはどうしたらいいかということをお話し頂きたいと思えます。

株式会社タニタヘルスリンク ヒューマンサービス企画部 部長/管理栄養士 龍口知子氏

（省略）

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏（モデレーター）

どうもありがとうございました。最後になりますけれども、森審議官、宜しくお願ひしたいと思えます。

外務省国際協力局 審議官（地球規模課題担当） 森美樹夫氏

日本政府が今後どういう行動をとっていかうことですがけれども、先程いくつかの施策、取り組みについてご紹介を申し上げましたので、何を考えているのかというところからお話を差し上げたいと思えます。

ご案内の通り、人間の安全保障という考え方がございまして、日本政府はこれまでこの人間の安全保障の考え方に基づき、個人、それからコミュニティのエンパワメントによって、集団だけではなくて、人間 1 人 1 人が持続的な栄養改善の成果が得られることを重視して参りましたし、今後もそういった措置をとっていきたいと思っております。我が国は Universal Health Coverage、UHC という考え方を推奨しております。この栄養改善に対する考え方は、UHC ですとか SDGs の誰一人取り残さないという考え方にも通じるものではないかというふうに考えております。

日本はこれまで、学校給食それから栄養教育等の優れた栄養政策によって栄養不良の時代を乗り越え、また、その後の過剰栄養による肥満についても他国と比べれば制御した形をとっており、世界に誇れる栄養改善に関する官民の知見を持っております。

一方で、今朝、ウドンケスマリー先生から伺いました世界栄養報告の内容においても、日本の栄養でも過体重の部分ではまだ課題が残るということでもありますので、国内でもこの新しい栄養の問題に対応していきたいと思えます。よって今後は、今回お話を頂きましたタニタさんですとか、様々な民間企業と手を組むことで、国際的にも国内でも同様に取り組んで参りたいと思えます。

官民連携を通じた栄養改善事業の国際展開というのは、日本の食品産業、それから農業、物流などのフード・バリューチェーンの国際展開に加え、日本の医療の国際展開にも繋がるものと

という観点から、今の内閣が推進しております日本の成長戦略に資するということだけではなくて、世界の栄養不良対策に対する日本の包括的な国際援助のアプローチとして大きな意味があるというふうに考えています。また、分野横断的な栄養改善の実施には優れた科学技術やイノベーションの力を持つ民間企業の方々、それからコミュニティと近接した活動基盤、実績を持つ市民社会 NGO の団体の皆様方との連携が重要になってきます。

これを踏まえ栄養改善事業の国際展開に向けては一昨年、平成 27 年に企業や関係省庁間の連携を推進すべく、栄養改善事業の国際展開検討チームを設け、ここで議論を行ってきております。実際、先程ご紹介のあった 2016 年世界栄養報告でも各国政府および、国際的なステークホルダーが国際レベル、国レベルの両方で協働することをその提言の中で強調しております。この観点から、今回の GNR セミナーのように複数のステークホルダーの方々が一堂に会して積極的に意見交換を行う場を持つこと、これはまさに約束から行動に移すために必要不可欠なことだと考えております。外務省と致しましても、昨年発足した民間連携パートナーシップ、NJPPP の枠組みなどを通じて、今後様々なステークホルダーの方々との連携を深めて参りたいと思っております。

それから昨年に引き続き、栄養改善への重要性が認識されるよう、今後とも国際社会に向けて、国際的な取り組みの重要性を伝えていきたいと思っております。現在、去年の G7 伊勢志摩サミットの結果を受けまして、今年のサミットで飢餓それから栄養不良についてどのような取り組みを G7 各国ができるかを議論しております。まだこれがどのようなコミットメントにまとまるかというのは不明ですが、今日皆様からお聞きした色々な意見それから有識者の方々のプレゼンテーションを踏まえ、日本が果たして実際にどういう行動をとっていくべきかというのは、皆さんと一緒に考えていければと思っております。どうもありがとうございます。

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏（モデレーター）

どうもありがとうございました。5 人の方々にそれぞれコメント頂きまして、ざっとまとめますと、ウドンケスマリーさんの方からは、クオリティのあるデータの重要性、またキャパシティ開発の重要性。セーブ・ザ・チルドレンさんの方からは草の根レベルのエンゲージメントが大事であるということと、コンテクスチュアルな分析が大事であると。そういうことを通じて根本原因というのをつきとめて、ハウスホールドレベルまできちんと行動変容を促していくというようなことがございました。また、セネガルの代表の方からは、政治的なコミットメントの重要性、またマルチセクターのパートナーシップを実行する中でシナジーを生んでいくこと。またオペレーショナルリサーチのようなものの大事さといったようなことを頂戴致しました。タニタ様の方からはデータの質というものがこれから重要になってきて、民間としてそうやって貢献のできる分野というものがあるであろうと。また、知っているということから行動に移すためには、また一つ仕掛けを工夫していくことが大事ではないかと。外務省の森様の方からは、日本の従来から主張しております人間の安全保障、個人コミュニティレベルでのエンパワメントといったようなものの重要性。また UHC のもとで行っているそういった活動も SDGs の

目的にきちんとアラインされたものであること。また日本で学校給食、栄養改善の歴史ございませけれども、過体重など若干反省すべき点もあるということ頂きました。またコミットメントにつきましては活動の中で、皆とともに考えていきたいという力強いお話を頂きました。

なかなか全体をまとめるのは難しいところがありますけれども、人間の安全保障ですとか、インクルーシブネス、そういったようなものを踏まえまして、きちんと栄養改善を行っていくには、先程セーブさんからございましたようなコンテキスト分析。その状況によってみな違うわけですのでそこをきちんと分析してやっていく必要があるだろうと。またそのためにはデータというのが大事。クオリティの高いデータそれはアカデミアからも貢献頂けますし、また民間の力もお借りすることができるだろうと思います。そういうものを通じましてマルチセクターでのここにいらっしゃるまさに皆様方のお力を頂きながら協力を作りながらやっていく、と。そこで本当の意味でシナジーが生まれるのではないかと。そしてレジリアントな栄養改善が図られるのではないかとということだったのかな、というふうにまとめてみました。

時間もちょっと迫っていますので、会場の方から、2、3、もしご質問等ありましたら、受けたいと思いますが、いかかでございますでしょうか？

質問者：

ありがとうございます。とてもためになりました。東京大学の本郷と申します。プライベートセクターとの協働ということ、とても大事だということと、あともう一つ、去年のWHAのリゾリューションで不適切なプロモーションですね、特に乳幼児の食品のプロモーションをやめるよというものが、全会一致で可決されたと思うのですが、食品会社のお金はほしいので、食品会社と協働するということと、食品会社のプロモーションですね、それぞれの国にその地域の物ではない外から持ってきた例えばインファントミルク、インファントフォーミュラとかそういうものを持ち込んだときの、その兼ね合いというものをどういうふうに考えていらっしゃるのか。それに対して日本が何ができるか、お聞きできたらと思いました。特にタイでは去年、International Code of Marketing for Breast Milk SubstituteがImplementation、国際基準が国で法制化されたというふうに聞いたんですけれども、その辺のことも含めてどうやったら日本が、それぞれの国の法律を守ることは大事なのですが、こちらから援助する側として、どういうふうにその辺について気を付ければいいのか、やればいいのかというのをちょっとお聞きできればな、と思いました。私の質問はわかって頂けたでしょうか？ウドンケスマリーさんはいかがですか？

世界栄養報告 独立専門家委員会 共同議長 エモン・ウドンケスマリー氏

ありがとうございます。それはグローバルな課題だと思います。それを検証するにあたりまして、様々な努力がなされていますが、タイは長年、実はこここの部分におきましては苦しんで参りました。申し上げなければいけないのは、マーケティングにおける規律、規制というのは10年かけて草案が実はそのままにされていたと、何も進捗が得られなかったという経緯があります。

そして公共衛生省、今の公共衛生省ですが、このタイのデータを見たときに、特に世界栄養報告を見たときにあまり進捗がない。例えば完全母乳育児ですとか特にその若い世代においてこれはかなり懸念であるのではないか、何か対策を打たなければいけないということになりました。これは膨大な作業を要したわけです。このステークホルダーを見て、もちろんまだ完璧な形にはなっておりません。しかしながら、この何かをしなければいけないということが決められて、そこでこのデータをベースとした法律化という部分における意思決定がされたわけです。どのデータを見てそれをどう推進するか、そしてステークホルダーを巻き込んでこれを見ましょう、と。これをやらなければいけない。完璧なものではないけれどもタイとしては前進をしなければいけない。まず第一に前進をすべきなんだと。

民間企業に目をむけて頂きますと、民間企業について申し上げたいのは、今の現時点では、やはりその中にはこのニーズがあるわけです。いかにして私たちが規制、ルールをきちんと制定する中で国際的なこのルールにもものつとり、なおかつこの栄養改善ということを正しい議題にのせて推進をしなければいけないという理解。それに対する行動です。そしてそれを影響を及ぼす形で、インパクトを及ぼす形でやらなくてはいけないわけです。成功というふうにはほど遠いのですが、少なくとも第一歩だと思っています。これがタイの現状ということであります。これが今までの経緯ということになっております。これでお答えになっておりますでしょうか？

外務省国際協力局 審議官（地球規模課題担当）森美樹夫氏

政府の立場というかですね、本郷さんがご指摘になった点というのは、おそらく、栄養の分野だけではなくて、国際保健、それから援助、国際協力全般に関わる、非常に重要な問題提起だと思っておりますけれども、要するに民間のセクター、それから ODA 実施機関、そういった人たちが現地での活動に関わっていくときに、どのようにコンプライアンス、これは国内的なコンプライアンスという意味もありますし、それから国際的なコンプライアンス、今ご指摘になった WHA の決議ですね、というケースもあるでしょうけれども、これを達成していくかということなので、一言で申し上げると、そういったコンプライアンスを全ての関係者で徹底させていくとしか申し上げようがないんじゃないかと思えます。特にですね、今マルチセクターアプローチという考え方の下、国際協力に関わってくる主体も政府機関だけではなくて市民社会の皆さん、民間企業、それから草の根の方々に至るまでですね、あらゆる方々が国際協力活動に関わってきている。この中で、どういう形でコンプライアンスを高めていくかというのは、国際協力体制全体の問題としても考えていきたいと思っています。

JICA 上級審議役 榎本雅仁氏（モデレーター）

ありがとうございました。まだ質問等あるかと思うのですが、時間も迫って参りますのでこの辺でこの会は締めさせていただきます。ありがとうございました。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン アドボカシー・スペシャリスト 大野容子（総合司会）

パネリスト、ファシリテーターの皆様、ありがとうございました。若干で終わりですので、そのまま残って頂いて。ご質問等ある方たくさんいらっしゃるかと思いますが、この後ランチレセプションもごございますので、その時にパネリストの方々もいらっしゃると思いますので、その際にでもご質問等ございましたらそこでお願いできればというふうに思っております。

それでは、閉会のご挨拶を、共催者でありますワールド・ビジョン・ジャパンの片山信彦常務執行役員から頂戴したいと思います。片山様、宜しくお願い致します。

ワールド・ビジョン・ジャパン 常務執行役員 片山信彦氏

本日は皆様お忙しい中お集まり頂きましてありがとうございました。共催団体の一つ、ワールド・ビジョン・ジャパンの片山と申します。発表して下さった皆さん、本当に良い発表ありがとうございました。色々な刺激、示唆を頂きました。またこのディスカッションをまとめてくださいました榎本上級審議役、本当に、私が言おうと思っていたことをうまくまとめてくださったのもう何も言うことがなくなった感じでございます。そして一番大事なことを最後に森審議官が仰ってくださいましたけれども、この栄養の問題は政府だけではなくて、市民社会、NGO、あるいは企業、国際機関、みんなが取り組んでいかなければいけない問題だということをお仰ってくださいました。本当にそのことをお聞きして嬉しく思っております。

NGOはNGOでそれぞれ考えややり方がございまして、グラスルーツで住民に寄り添った形でこの栄養の改善の取り組みを進めております。皆様のお手元に、このように1枚のパンフレットと言いましょか、チラシが入っていると思うのですが、私ども4団体、この栄養のセミナーを主催しております4団体のNGOで共同で、提言を出しております。食と栄養のための開発戦略の策定をということが一つと、それからぜひ日本の政府としてより多くの栄養分野への資金拠出をお願いしたいということで、こういうことも単独のNGOだけではできない政府と民間、あるいは国際機関と一緒にになって取り組んでいくことの一環だというふうに理解をしておりますので、ぜひこういうことも覚えて頂きながら、前に進めていくために、インパクトを残すために今後とも皆様とご一緒に歩んで参りたいと思っております。どうぞこれからも宜しくお願い致します。今日は本当にありがとうございました。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン アドボカシー・スペシャリスト 大野容子（総合司会）

片山様、ありがとうございました。それでは、これにてセミナーを閉会致します。最後に、本当に遠く海外からいらして頂いたパネリストの方々、ファシリテーターの方々、ご参加頂いた方々にぜひもう一度大きな拍手をお願い致します。（拍手）本日朝の早い時間からご参加頂いて本当にありがとうございました。

以上